埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

コロンビア ボトムアップへの期待

著者	内田 雄一
雑誌名	埼玉学園大学紀要. 人間学部篇
巻	2
ページ	35-47
発行年	2002-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00001029/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

コロンビア　ボトムアップへの期待

Colombia in expectation of "Bottom Up"

内　田　雄　一
UCHIDA, Yuichi

"Bottom Up" might be still considered as a possible model case for "take off" of the third world. Japan after the Meiji owes his economic success to this active participation of massive subordinates, however, if this historical achievement of ours could not be adapted to, for example, Latin American world, evidently, it is because they have had their own peculiar life backgrounds characterized mainly by their patron-client relationship.

This "clientelismo" has hindered the people, illiterate and disadvantaged, from cultivating their own will, decision making and then acting; they have been rendered passive, isolated one another among themselves, waiting for "charity deeds" their patron bestows to their clients. The leaders have been indifferent of national welfare and the people apathetic of even regional development.

In the midst of recently accelerated globalization the difference between developed and underdeveloped countries appears more and more distinct. The government threatened by the very retard of the nation has started to try to mold private power, nevertheless, the real formation of "Bottom Up" can be hardly attained by "Top Down" but by "stand firm" of the awakened desperates.

The following is a case study on this subject in Colombia.

キーワード：従属、クリエンテリスモ、底上げ
Key words：dependence, patron-client, Bottom Up

目　次

はじめに
第1節　経　済
　1．豊かさから貧困へ
　　依存心とグロバリゼイション
　　貧富の格差と暴力
　2．希薄な民力
第2節　政　治
　1．植民地の後遺症
　　イギリスの革新とスペインの保守
　　共同体への結集と孤立
　2．クリエンテリスモ
第3節　教　育
　1．危険な高非識字率
　2．戦略としての教育
　3．成人教育
　4．ボトムアップの試み
おわりに

はじめに

ボトムアップによる日本型の発展モデルは、オリジナルな創意を必要とする高度経済成長期にも有用なのかどうかはさしおくとして、途上国経済の「離陸」には有効なのではないかといわれている。たいした自然資源もなく、資本にも限りがある、ふんだんにあるのは人力のみ、という途上国が多い。しかしながら、一見したところ同じような後進状態にあった日本の開発ケースが、後発諸国になかなか適応されがたい。頼みの人資源の質がちがうからだ。

18、19世紀、ヨーロッパに比しても遜色がなかったとされる日本の庶民がそなえもっていた、読み書きソロバン能力と一般教養知識の普及、それに、島国の同質世界のうちに終始してきた同一民族がもっているまとまりの良さ、この双方を当然の、天与のごとき国民性として併せもっている国家民族は世界でもまれの部類に入るだろう。明治期の統一国家教育が、日本人を基礎的な知能を共有した組織されやすい民衆へと育て上げた。

現在の発展途上地域には、幾世代にもおよぶ確固たる統一政権もなく、民族の結集もない、という国家がすくなくない。傑出したリーダーが現れ出ても浮き上がってしまうケースもある。バックアップできる理解力と凝集力をもった民がいないからだ。偉大なる、また、卑小なる権力者の下で、民はほとんどいつも受け身の待ち人として、それも、バラバラに分断された状態にあった。

ラテンアメリカはコロンビアで、国興しのための民興し、の動きが目立つようになってきた。その努力が結実するのは容易なことではない。以下、その背景と経緯をみてみよう。

第１節　経　済

１．豊かさから貧困へ

1960年代、コロンビアでの話である。知り合いの男性は10ヶ月かけて世界一周旅行をした。友人の知人は５年間に新車を３台買った。ある家族は６名でヨーロッパに３ヶ月遊んだ。まれな話ではなかった。いずれも中産階級に属する人たちだった。メデジンとカリには新しいビルが次々と建てられた。そこのブティックにはパリ、ロンドン、ミラノからのオートクチュールがあふれ、高級レストランは連夜客でうまった。コカインマネーによる謳歌、繁盛がよく口にされた。

20世紀に入り、ラテンアメリカの繁栄は70年代まで続いた。欧米諸国に食肉、コーヒー、木材などを売って稼いだ外貨をもって、軽工業を起業した。地域全体のGDP成長率は年５％を超え、この間、メキシコとブラジルは平均６－10％の高成長率を維持していた。その経済のダイナミズムは「メキシコの驚異」「ブラジルの奇跡」ともてはやされた。

が、この開発戦略は失敗に終わった。各国政府はそれまでの開発が多額の借金のうえに成立、と反省。活力源は自国政府にではなく、外国資本にあった。ラテンアメリカ各国の外債残高は、2001年、ブラジルが2200億ドル、メキシコが1500億ドル、アルゼンチンが1400億ドルと巨額にふくれあがり、コロンビアも380億ドルの重荷を背負っている。毎年の負債返済は国庫を圧迫し、社会資本投資に大きな制限を加えている。コロンビアでは(01年)、国家予算57兆ペソのうち、30％が債務返済に、10％が治安維持に、社会投資はわずかに10％でしかない。

近代化を急ぐ各国政府は工業化政策をとっ

た。しかし、その実現に必要なインフラが未成のままだった。そこで、輸入代替産業の育成に政策を替えた。そして、これも失敗に終わった。市場規模に限界があった。が、ここで致命的だったのは、この国内産業育成の意図が、自国産業を保護する、保護主義的貿易政策となり、自国製品の国際競争力の低下を招くこととなってしまったことだ。

依存心とグローバリゼイション

政府が大幅に経済に介入してきた。その結果、企業人の間に親方日の丸的態度がはびこり、挑戦的企業精神は失われ、ラテンアメリカ産業の技術力、国際競争力の発展が萎縮してしまった。

80年代に入ると地域経済はわずか１％成長にとどまり、そのパーフォーマンス悪化の主因は、目に見えるところでは債務返済のしわ寄せを受けた緊縮財政にあったが、根本的には民間活力の未生育、未発達にあった。

国際競争力を十分育てないまま、80年代の終わりから歴代コロンビア政府がとった経済の開放政策は、国の生産基盤をもろに直撃した。斜陽に入った国内経済はさらにダメージを受けることとなった。91年、輸入関税は38％から12％に引き下げられ、輸入品が国内に大挙流入した。「この年以降、農産物の輸入は年70万トンから700万トンへと急増し、80万ヘクタールの耕地が消失した」（El Tiempo, 3-3-02）いわゆるネオリベラリズムの被害は甚大だった。98－00年の間に30万人が職を失った。貧困階層は180万人増えた。99年のコロンビア経済は4.48％のマイナス成長を記録した。有職者世帯の85％が最低保証賃金の２ヶ月分以下で暮らさざるをえなくなった。そして、１ヶ月以下の者が400万人以上いる。数多くの市町村が数ヶ月前から職員の給料を払えなくなった。農村では11人のうち10人が赤貧状態にあるとされた。ラテンアメリカ全体でも、70年以降、貧困者数は２倍になり、５億人のうち45％が貧困者といわれている。（同上）

何人かの識者は市場の開放が元凶だという。しかし、真の元凶は政府の長期にわたる民を軽視した統治、資本家と結び付いた権益政治、革新を創造できない保護政策、そして、民の力のなさ、すなわち国力のなさ、だろう。こういったことは外の競争世界に出会って初めて痛感することだ。国民のマインドが依存を習慣としてしまうようになったとき、それを正すのは容易なことではない。

ラテンアメリカは、土地面積で世界の15％、人口で８％を占めている。それなのに、93年度、日本からラテンアメリカへの輸出は全輸出の2.31％、ラテンアメリカから日本への輸出は2.98％、同様に韓国は3.49％と1.85％、中国は1.08％と1.21％でしかなく、ヨーロッパ諸国でも、イギリス1.23％と1.29％、ドイツ2.43％と1.38％、フランス1.84％と1.15％でしかない。スペインでも4.72％と3.90％のみ。ということは、米国の13.98％と9.34％を除き、対ラテンアメリカ輸出入貿易％はすべて５％以下。５億の人口を有しながら、ラテンアメリカ大陸の世界貿易への参加はいちじるしく不十分、制限されているといわざるをえない。ラテンアメリカ世界は世界の経済をはじめとするダイナミックな諸活動の外に、遅れて位置している。これ以上の孤立を続けることは、国をますますじり貧へと追い込むことになる。世界のスタンダードに合わせるべく国を徐々に開いていくしかない。競争に勝てるような態勢を整えていくしかない。

その態勢とはなにか。民間活力の育成であ

る。時間がかかるけれど、国造りの基本である。スポンサー、ドナーにすがり、交付金、助成金の類いに頼るのを制限し、クリエンテリスモの悪弊を排して自活力を育てていくことだろう。知的好奇心を養い、取り組んだ仕事を貫徹する意思の力をもち、自己犠牲をいとわない。頼るべきをもたない民間の企業家精神とはそういうものだろう。この底上げがないかぎり、すぐれたリーダーの輩出をもってしても社会の安定と躍進は望めない。もっとも手っ取り早い発展への近道、外資の導入にしても、自国に勢いがなければ入ってこない。民をいかに育てるか。国の明日は民の勢いにかかっている。民を育ててこなかった国家にとっての痛恨事である。

貧富の格差と暴力

ラテンアメリカの発展に不可欠な外資の導入がおもうように捗らない。投資家が肯定的な判断を下すような条件整備がおこなわれていないのだ。政府の統治能力、社会の安定と国民の均質的な力量が問われている。貧富の格差大は外資が入ってくるための大きな障害だ。上位20％の高所得所帯の、下位20％所帯にたいする所得分配比率は、ブラジル32.1(89)、コロンビア15.5(91)、ペルー10.3(94)、米国8.9 (85)、韓国5.7 (88)、日本4.3 (79)となっている。95年、ラテンアメリカでは人口の上位富者20％が国家収入の58％を独占していた。コロンビアにおける階層別人口比は、上層5.5、中層34、下層63.3となっている(00)。それでいて、貧者が国民の半数を占めるこの国は世界の億万長者番付けに3人を送り込んでいる。

格差を生んでいるのは横行している不正行為である。政界財界の腐敗はこの国の風土、文化とも評されている。今日、コロンビアでは毎時間、1億2千万ペソ（02年換算で、500万円ほど）の公金が横領されている、といわれる。00年、ドイツに本部を置くトランスパランスィ・インターナショナルの調査結果によると、コロンビアは、対象99ヶ国中60位に位置し、「透明度」において下位3分の1のところにある。麻薬取引、誘拐などで巨利を博しているコロンビア最大のゲリラ組織FARCは同時に国内で最大富裕組織でもある。

合法的抗議が効を奏さないと、抗議は非・反合法の形をとり、暴力に訴えることになる。正義に基づいた抗議は、市民権を得られないまま長年をへて、正義の道からはずれていく。暴力の直接、具体の使用者がイデオロギーと無縁の犯罪者となったとき、権力者の不正が社会全体にとって最大の危険因子となった。不正、腐敗が犯罪的加害行為の正当化として使われるようになったからである。FARCの兵士の90％が小卒以下、それゆえ、失業中。かれら若者にとり、FARCとは自分に給料をくれる雇い主でしかない。銃をなぜ手に取るのか、にしても、政治を変革するというスローガンより、税金泥棒をやっつけるための誘拐、破壊、殺傷のほうがはるかにわかりやすい。

コロンビアでは、00年、毎日72名の殺人事件が記録された。毎時間3人が殺されたことになる。99年には計26,250名が、過去10年間には25万人が命を奪われ、この殺人件数はラテンアメリカ諸国のうちでも最高である。10万人当たり、60名となる。エルサルバドルの25名、プエルトリコの23名、米国の9名、ペルーの4名をはるかにしのいでいる。同様に、南北米大陸の主要都市における殺人発生件数を見ても、ワシントンで73件、ニューヨークで

の16件を軽くオーバーし、カリで102件、メデジンで169件とコロンビアが断突である(El Tiempo, 12-3-01)。

2．希薄な民力

国際化の時代は異文化の衝突をもたらす。勝れたリーダーシップに率いられた、マスとマスとの競合でもある。組織力の優劣が争者の勝敗を決める。秀れたリーダーと組織を構成しているメンバーの能力が集結したとき、その集団、社会は強力な競争力をもつ。より多くの成果を競う国際ビジネスの世界での強者は、優れたリーダーシップと強い向上意欲をもった現場、の双方をあわせもった国家であろう。それは、たとえば90年代以降の中国であろう。

ひるがえって、凡庸な独裁者をもった国民は悲惨であるが、身勝手な部下をもった意欲的指導者も悲劇の主人公である。国興しには、卓越したリーダーの要請に応えられる積極性をそなえた民衆の存在が欠かせない。優れた指導者が、偉業を成し遂げるためには、かれを支える秀れた部下の協力が必要である。千人のスクレ将軍を得ていたら、シモン・ボリヴァルは「解放者」で終わらず「建国の父」になっていただろう。

なぜ、千人のスクレ将軍がいなかったのか、また、今もいないのか。民間活動が未育だからである。なぜ、未育なのか。クリエンテリスモの伝統が根を張っていたからである。支配階級は、お駄賃と引き換えに、民衆を骨抜きにした。民はやる気を奪われ、ボトムアップによる中産階級の形成は促進されなかった。

また、たとえ千人のスクレ将軍がいたとしても、かれらの間に連帯感、一体感がなければ、協調による国家建設は頓挫をきたしたことだろう。将軍たちの間の反目、ライバル意識、敵対心が、たとえば華人間で建設的な役割を果たした頼母子講的な、共同出資、共同運営といったアイディアすら生むことはなかっただろう。政管財界のボスたちはついこのあいだまで、そのちいさな私世界をそれなりにワンマン経営できると思っていた。しかし、栄華をきわめ、たがいに覇を競ったあのヨーロッパ各国すら、EUをつくり、通貨Euro経済を発足させるに追い込まれたこの時代に、この非協調的な個人主義はあまりに時代錯誤ではないだろうか。

第2節　政　治

1．植民地の後遺症

ラテンアメリカのインテリは言う、われわれは民主政府をもってはいるが、その制度の運用、国民のメンタリティは民主的からはるかに遠いところにある、と。秩序を軽視し、法律に従わず、約束を守らず、他者の権利を尊重もしない。責任感は根づかず、正直をバカにし、正義感を有害とみなし、十分金も無いのに節約の徳は血のなかに流れてもいない。事を是が非でも達成しなければ、という、しつこい使命感も希薄である。なにかといえばお上頼りで自立した市民マインドが確立していない。フェアプレイの精神が社会に浸透していない。公正という価値がおろそかにされている。

イギリスの革新対スペインの保守

この害毒については、スペインの南米入植と同時期に北米に入植したイギリスによる植民地経営の成功を、対比的に考えてみるとよく判る。

まず、イギリスの革新に対するスペインの保守、という対比が考えられる。南米のスペ

イン移住者が中世以来のヨーロッパ封建体制を新天地で継続したのにたいし、イギリス植民者は、古い大陸の制度、習慣をあとに残し、教会の権限、貴族、平民など人の不平等から身を自由にしている。マリアテギ（ペルーの現実解釈のための7試論[1988]）によれば、北米には当時のヨーロッパで形成されつつあった未来に属する精神と経済の萌芽が移植されたが、その一方で、スペイン系アメリカにはすでに凋落しつつあった過去に属する精神がもちこまれた。スペイン植民地の世界は、ヨーロッパですでに安定し、成熟した社会の投影であった。植民地社会は変化を望まず、ただ、持続を望んだ。

スペイン植民者たちは、労働のため黒人奴隷を輸入したので、生産は奴隷制に依拠し、これが経済発展を阻害し、かれらクリオジョとよばれる南米生まれのスペイン系植民者の子孫は資本家的ブルジョワジーへと発展することがなかった。一方、イギリスからの新来者は農夫としてみずからの手で荒野を開墾し、農地を耕し、いろいろ企て、挑戦し、冒険し、たがいに結束し、自分たちの事業を組織し、近代産業の育成へと向かう資本家となった。イギリス人が過去を切り離し、母国に置いて来たのにたいし、スペイン人は母国との継続線上にあり、その臍の緒を断つことがなかった。

北米のプロテスタントのモラルは各個人に努力、精勤、節約を推奨する。各人が自分の成功と不成功に責任をもった。その一方で、南米にはカトリックの位階秩序があり、その権威的支配は個人の自由発想を窒息させ、創造、企画精神に規制を加えた。北米における機会平等の横社会にたいし、南米には君臨と保護、従属と依存という縦社会の基が築かれた。北アメリカには、自立した個人が「社会契約」を介しそのうちで共生する、意欲的、活気のある社会が展開されていったのに、南アメリカでは、依存的な数多くの人々が権力者のもとに集ってぶらさがる、活気のない停滞社会が始まった。

共同体への結集と孤立

2番目の対比として、たがいに自立しかつ結び付いた集団成員、と、たがいに結び付かず権力者の支配下にある孤立者、という人の分類がある。

Carlos Rangel　(The Latin Americans [1976]) は言う、「上昇社会とは各個人、各グループが全体につながっていると感じている社会」と。16－7世紀のスペインの延長社会に生きている人々は位階制度、権威、地位にこだわり、利己主義にとらわれ、社会全体への関心を失い、全体に帰属しそれを構成する部分となることがなかった。他者との共有をやめてしまった。他者をかえりみない極端なエゴイズムが社会を分断した。無連帯と無帰属。自分が生活している社会との繋がりがない。さながら、異邦人であった。自分がそのうちに暮らす植民地社会とは、育成の必要のない、収奪の場でしかなかった。植民地の運命と自分の運命とは別個のものであった。

ラテンアメリカ社会はその誕生時から、分断、分裂、バラバラの不統合状態にあり、その土地、社会への帰属意識、国民意識は育たず、希薄のままだった。

自分がもっている権威意識、過度な自尊心などが組織への反感を生み、共同体のなかに組み込まれることへの生理的嫌悪感を助長し、規則への不服従をかき立てた。自分一人自足してある。だれかを、なにかを必要するのは屈辱だ。社会は好奇心、探求心、柔軟性と共生、

協調性、寛容など、進歩と発展に不可欠な基本的性格を欠いていた。広く共有された権限に価値を置かなかったため、魅力的な民主主義をつくれなかった。

この権威的で尊大な自意識にとりつかれた人々は労働、手仕事を蔑視した。仕事とは読み書き、話すという知的作業のことであった。この「知的」の最高段階は政治家、外交官、裁判官、医者、学者などであり、モノを扱う技師、製造業者はその範疇に入っていなかった。知的に言葉遊戯にふけり、具体的な行動をおこさない、という非生産的マインドが蔓延し、そこからは革新、起業精神は生まれてこなかった。手軽に現存する快適を好む精神風土は、今を享受し、将来に向けて投企することをわずらわしいと避けた。未来の建設、現在の改良改善も、仕事量を増やすことになるので、忌み嫌われ、とどこおった。

米国への入植者は庶民であった。そして、支配者をもたなかった。政府も広大な新天地の隅々まで配慮し、コントロールすることはできなかった。政府の介入を期待できなかった人々は他からの助けを求めず、自分たちで力を出し合い、共同で教会、学校、医局、道路をつくった。一生懸命働いた。それは自分たちの共同体の共有物となった。その建設、生産の仕事、労働には皆全員が同じ資格で、平等に参加した。

1831年から米国に1年余滞在したフランスの若き貴族、Alexis de Tocquevilleは、アメリカでは社会の基調が平等にある、と書いている（阿川尚之[97]トクヴィルとアメリカへ。p－96)。その平等は信じられないほどのものだ、と。白人の従僕は自分が主人と同格だと信じて疑わない、それを世間もまた当然と受け入れている。社会的地位の差ゆえの傲慢は露ほども見られない。ラテンアメリカ独立運動の先駆者であったスペイン貴族出身のFrancisco de Mirandaも、米国滞在中に招待されたバーベキュ・パーティの席上、驚き、感嘆している。行政長官と一般庶民が、一緒に飲み食いし、皿をまわし、同じコップで飲んでいる、と（Rangel[87]に引用、p－26)。

そこには、差別感情なく、共有、共生への嫌悪感もなく、その結果、全員が一緒になって新世界で自分たちの生活をきずき、ともに働き、ともに苦労と喜びをわかち合う人々がいる。前例のない、伝統の軌跡もない、支配的習俗、思想もない社会。無階級社会で新しい公、を皆の納得のいく形でつくりあげた。その公は、皆が参加し、各自がその部分となっていると自覚できるもので、参加者のエネルギーと創造力によりつくられ、より活動的になっていくものであった。学校教育、治世、産業、商業などの分野にわたり、地方社会と国家の繁栄をボトムアップする、下からの自生、民間活力であった。

イギリス人入植者は、みずから労働に励み、新しいダイナミックな地域の建設者、居住者として北米を開拓したが、スペイン人は南米を本国の付属地とみなし、奴隷、現地民を使い農業、鉱山業の業務を管理する主人となった。ラテンアメリカは独立し、植民地の従属状態が終わっても、その独立はクリオジョによるものだった。民衆は、独立とは無関係に従前どおり、未成熟のまま依存体質をもち続け、自己決定能力を欠き、ご主人様に身柄を預けたままだった。今日を生きるという点では、独立戦争とそれに次ぐ数多くの内戦のあいだ、安全はボスの庇護下にしかなかった。自衛手段をもたない農民は独立前と変わらな

い封建的主従関係の継続のうちにしか生存できなかった。安全と生活の安定、保証は、家族の外に出たとたん、「御領主様」のうちにしかなかった。自分たち民の力だけでは明日への生存の確保も難しかった。

2．クリエンテリスモ

解放戦争の惨たる犠牲を介して独立を獲得したあと、ラテンアメリカがかかえこんだ大きな問題は、共和国がたもとを別ったスペイン帝国の旧習、とりわけ、人の主従関係を葬りされなかったことだった。自立生活を営みにくい一般民衆、とりわけ、国民の大多数を占める農民にとっては、スペインの王侯支配者がクリオジョ有力者に代わっただけのことで、独立の恩恵などなきに等しかった。反近代的な臣従関係、強者と弱者間の利害関係、より正確には、弱者を保護することで得る強者の莫大な国益搾取の構図には変化がなかった。

スペイン植民地時代につちかわれたこの「依存の上下関係」(El Tiempo, Alfonso Esquerra Fajardo, 9-7-00) は、今日においても、コロンビア社会活動の隅々にまだ残っているのが見られる。家の前のこのちいさな坂道のアスファルトは、5年前の選挙のとき、ひとりの候補者がつくってくれた、とか、娘ふたりの学費は昨年の大統領選挙のとき立候補者の関係者が、とか。仕事を手に入れる、電話をひく、急病人を入院させるのにも、といった日常の便宜、利害関係のかたわらに、欧米先進国ではすくなくなっている、各種の相談事がある。非識字率の高い山村に住む家族へのよろず相談はNGOが担当し、極貧家庭の女性向け職業訓練センターでは心理学専攻の女子大生が相談室の机の前に座っている。

弱者は、この社会システム以外のものを知らず、その中だけに生きてきた。当然、かれらは思う、保護者がやってきて橋を作ってくれる、なぜ、橋づくりを学びその資金を用意しなければいけないのか、なぜ、村人がこぞって協力し、力を出し合って橋を自分たちで作らねばならないのか、と。村人は自分で考え、決定し、行動することに慣れていない。自力でがんばり、努力し、達成したときの喜びを自分史のうちにほとんどもっていない。と同時に自衛のためには、常に卑屈で、その結果、面従背腹の、狡猾な、と搾取者がいう、欺瞞を強いられている。自助努力と共同作業を、国民の60％がもっていない国、社会の現状と未来についての展望はけっして楽観的なものではない。

第3節　教　育

1．危険な高識字率

スペイン植民地下、その固定された停滞階層社会は教育を重要視しなかった。進歩の必要が公認されていなかった。支配階層の関心はスペイン宗主国に向き、植民地社会は未開の地扱いされたままだった。独立後も首都ボゴタの顔はヨーロッパの方を向いていた。19世紀末から20世紀始めにかけて千日戦争が起こり、10万人が死んだ。第一次大戦の勃発により、ヨーロッパ詣でができなくなったとき、クリオジョのエリートは自分たちの生活世界の悲惨に目を向けた。1931年、小学校卒業生は就学対象児童のわずか1.7％でしかなかった（Aline Helg [1984], p－39)。

政府は教育を国家発展のため必要と思うようになり、国家予算のうちの教育関係費を増やしたが、その内訳は、1951年度、大学に49.2％と半分が割り当てられ、小学校には

11.4%でしかなかった。教育はエリート育成のためにあり、その結果、国家発展の恩恵に浴したのもエリートだった。20世紀後半、ラテンアメリカ全域でも大学生は1%程度だった。第2次大戦末、農民はほとんど読み書きできず、ヨーロッパ、米国に比べ、ラテンアメリカの教育は70－80年遅れている、と言われた。農村校舎には、ときとして、机、椅子、黒板もなかった（Aline Helg, ibid)。

コロンビアで初等教育の必要性、大衆の識字教育の重要性が認められ始めたのは1940年後、マルキシズムが本格的に浸透し、無数の貧民とその悲惨の原因となっている非識字が社会の安定、安全にとって危険、と理解されるようになってからだった。国民の無学が国のうちにひそむ敵となった。農村に、都市のスラムにも学校がつくられ始めた。中産階級の養成なしに国の発展なし、と識者は論じた。

しかし政府の努力にもかかわらず、貧富の格差が教育機会における格差をつくっている。情報量、英語力、外国留学用奨学金などの取得に貧困家庭の子弟は参加できない。コロンビアを含め、ラテンアメリカの教育の成果がいぜんとしてエリートにより多く独占されているのは明らかである。フランスの社会学者Bourdieuの言う、再生産機能をもった教育、である。金持ちがこどもに教育投資をして、自分のもてる富の再生産をさせる。貧乏人は、この金持ちが高等教育を介し世代から世代へと伝承する富の構造のうちに入っていくことができない。87年、公共の奨学金の50%を上位20%が得、下位20%は5%しか、という記録もある（Hernando Diaz Uribe[1998])。

2．戦略としての教育

コロンビアには、我が国の社会的欠陥は無知である、という人もいる。国民の平均就学年数が10年以下の国には未来の希望がない、ともいわれる。21世紀はますます競争社会になる。国力は一次資源でなく人材になる。石油、コーヒーはおろか、国民に必要十分な水すらないシンガポールは、育成した人材によって、ここ数年世界の競争力上位5位のうちにあり、一人当たりGNPは3万ドル以上を記録することに成功している。96年度の世界の科学、数学コンクールで、上位4ヶ国を占めたのはシンガポール、韓国、日本、香港であり、それについで、米国、ドイツ、フランス、イギリスと続き、コロンビアは、41ヶ国中40番目だった（El Tiempo, 21-4-98)。20世紀を生き延びてはきたが、科学、技術がないので、21世紀を生き残ることはできないのではないか、と、El Tiempo紙は、教育特集を組み、教育か死か、をそのタイトルとした(16-4-98)。

教育は今後ますます発展のための決定的戦略要素となる。どのような教育をもっているかによって、その国の将来を予見することができる。劣悪の教育内容は低成長をしかもたらさない。なぜ、コスタリカは1ヘクタール当たりのコーヒー生産においてコロンビアの2倍なのか。コロンビアのコーヒー栽培主の24%が非識字なのにたいし、コスタリカではこの数字が2%以下である（El Tiempo, 17-4-98)。90年度、ラテンアメリカでの100万人あたり、国別科学者数をみると、キューバの1205名を筆頭に、コスタリカ538名、ブラジル432名、パナマ354名、そしてコロンビアは138名でしかない（La Patria, 23-8-98)。

世界の経済競争に生き残り、勝つため各国政府は、もうずいぶん前から、教育を重大国家戦略のひとつとして、それに投資してきた。

アジア経済のめざましい進展はその教育政策のたまものである。韓国では若者に勉強させすぎ、とまで言われている。

３．成人教育

メデジンには13－64歳で小学校の中退者が30万人ほどいる。そのほとんどが最下層の出身である。中高年は子供時代を過ごした村に学校がなかった、という理由が多い。30歳前後の男女は、両親が亡くなったり家出したりで、捨て子となり、子供時代から店の手伝いとか子守りなどで働いて、十分学校に行けなかった、という。

就学率が80％を達成できないなら、また、成人の識字率がおなじく80％を超えないなら、その社会に発展はない、ともいわれる。低教育、低成長である。世界の途上地域で、20世紀の後半、都市工業の育成による「離陸」が始まった。ラテンアメリカとカリブ地域は、1960年、アジア８ヶ国（韓国、香港、台湾、フィリピン、インドネシア、マレーシア、タイ、シンガポール）と同じ、1800万人の高卒者をもっていた。それが30年後の1990年には、ラテンアメリカとカリブで4500万、一方、アジア８ヶ国は7000万人、と、ラテンアメリカとカリブの1.5倍の高卒者を育て上げていた。そして、その80％が卒業と同時に職を得ている。このちがいはどこからきているのか。両地域政府の教育予算配分先のちがいである。アジアでは小学校への全員入学向けに教育投資がなされたのに、ラテンアメリカでは中高生以上の教育が重視、優先された。そして、アジアでは小卒10人のうち８人までが中学へ、なのに、ラテンアメリカでは小学生の半分が卒業できないでいる（Hernando Gomez Buendia[1986], p－83)。

コロンビアで、非識字率の高さが国家進展の障害と理解した政府が、庶民の子弟向け大衆教育、非識字に近い　―小学校中退と小卒段階にとどまっている大人を対象とした―成人への教育を具体化し始めたのは、80年代になってからだった。経済発展のためには外資産業の導入が欠かせず、そのためには受け皿として、良質で規律正しい労働者の養成が求められる。とりわけ、工業化には識字教育のみならず、理数技術教育が欠かせない。新しい市民の育成が迫られてきたのである。カトリック系、また宗教とは無関係の無数の請け負い組織が行政府と契約して、この成人教育をおこなっている。1987年度の統計で生徒数200万人、文部省予算の0.5％が割かれたが、86年度予算によれば、大学生一人の教育に５万ペソが割り当てられているかたわら、成人教育生には54ペソしか支払われていない。受講生は圧倒的に女性が多く、数学ができないので裁断ができないという縫製女工、調味料の勉強をしたいがスペイン語が十分判らないのでという仕出し屋志願の家庭婦人、地区開発委員会の女性たちとレストランを開店したが、２年目にリーダーの女性にもうけを全部持ち逃げされてしまったという未婚の母たち。計算ができず、帳簿の付け方が判らなかったので、と。

教育を受けた者はだますことができる、貧者はだます術を知らないので、だまされ、貧しいままだ。

４．ボトムアップの試み

この成人教育のかたわら、職業訓練を担当しているＮＧＯがすくなからずある。職業技術の伝授に加え、かれらが生活に恵まれない受講生相手に掲げている達成目標は、自立、

連帯に向けた意識改革である。自己決定できないと決め込み、そして、人間関係に不器用で孤立している貧しい人々に、自信と友愛を与えることをめざしている。

あるカトリック尼僧会運営の工房では、恵まれない女性たちに縫製を教えている。100名弱の女たちのうち高卒は２、３人のみ、小卒以下がほとんどだ。夫または恋人をもっている者も10人にひとりいるかどうかだ。寡婦、離別、未婚の母と全員が子もちである。コロンビアでは、96年、全所帯の25.2％が母子家庭である。平均して、教育は５年に満たない。メイド、清掃、露店などの仕事をとうして得る収入は最低保証賃金の0.5から0.7ヶ月分。このトレーニング・センターに入所できた女性たちは、そのなかでも、タバコ売り、ストリップティーズ、売春婦、麻薬売りで投獄され出所したばかりの女性、など、皆が社会の最底辺の出身である。

このNGOはこういった女性たちに、各種ミシンの使い方、ししゅうデザイン、製品のチェック、製品の箱詰めなどの技術を教え、それに加え、外部講師に依頼し、注文の取り方、価格の設定、納期厳守など経営のノウハウを教授してもらっている。仲間内での協調、参加、相互性など共働に必要な気配り、心構えについても話している。尼僧たちの努力により、企業の協賛を得て製造注文を受けている。女たちは学習しながら、収入を得ている。目標は、２年の学習を経て、独立共同企業の創設、自前の収入確保と、大きく野心的である。その日のためミシン購入用の貯金もしている。自主管理による企業員としての独立、自立である。従属、依存というクリエンテリスモの悪後遺症に真っ向対立している。みずからイニシャティヴをとり、自分の人生を自力で切り開いていこうとしている。

当然、問題は山積している。女たちはそろって貧しすぎる。家賃、電気水道料金、子の授業料を払うお金が無い。バス代がないので、片道1時間30分、歩いてくる者もすくなからずいる。妊娠してしまう女性、麻薬売りに手を出してやめてしまう者、仲間とケンカして出て行ってしまう女。金なし、学校教育なし、家族なし、親友なし、あるのは子どもだけだ。毎日が克服しなければならない困難でいっぱいだ。そして、毎日が疲労と無数の不安との闘いである。うちのめされたとき、すがれるのは、さんざ説かれた輝かしい自分たちの企業がスタートする日への希望と子どもへの愛着だけだ。

困難は、技術の習得よりも、むしろ仲間内での共働にある。仕事は共同作業である。各員が流れ作業を素早く、ミスなくキッチリと仕上げて次の工程にまわさなければならない。毎日、１時間以上歩いて着いたとき、すでに疲れきっている彼女たちにこの仕事は超人的な努力を強いる。納期に間に合わせるため、一日８時間の労働を10時間に、12時間を14時間に増したときもあった。

学校レベルでも、新しい教育はチームワーク精神を力説している。共同作業の育成を基本事項のひとつとしている。しかし、チームワークに必要な精神性を教え込まれても、貧困からくる疲労に打ちのめされた彼女たちがなごやかな協力関係を維持していくことは、ときに人間の力、我慢の限界を超えた。もともと、極貧とクリエンテリスモの風土が彼女たちのうちに必要な社交性を育んでいないというところからスタートしている。劣等感と受動性から、隣人への働きかけという習慣が身についていない。たがいの生活内情につい

てはほとんど知らない。信頼感よりは不信感の方が強い。団結、協力、共生、相互援助、といった徳目は彼女たちの日常心情とは相反するものだった。助け合うこともできないほど、どうしようもない貧しさが女たちをひとりぼっち、孤立させてきた。

身内、親族とのつきあいもほとんどない。3人の子の未婚の母の父は、自分の部屋に鍵をかけ、娘、孫を自室に入れない。返済できない借金をかかえ、食べ物をくれないと怒る子をかかえた娘は、小間物屋を営む父の懐具合を知らず、父に援助を頼むこともできず、ついに、誘われた仕事を売春と予知しつつ、スペインに出国してしまった。同じように、何人かがそれぞれの、のっぴきならない理由でセンターを去っていった。

そして、数企業が彼女たちを見捨てた。大量生産が可能な工場相手の方が注文を出すには好都合だ。女工の数すくなくなり、ときに納期を守れない彼女たちに代わり、最新式のミシンを駆使し数多くの熟練工を規則正しく組織した工場の方に、注文はもっていかれてしまった。それでもまだ半分ほどの女たちが残っている。収入は激減した。ほかに仕事の当てもないという苛酷な事情もあるが、疲労とストレスに抗して頑張っている。

現状は残酷なまでに惨い、先の見通しももうひとつ勇気づけになってくれない。けれど、この苦闘のなかからこれまでの歴史をとうしコロンビアが知らなかった新しい活力が生まれつつある。ほとんど自分たちの力だけを頼りにした自力更生の粉骨砕身、自活力による苦心惨憺の闘い。貧困脱出のため、そして、子に教育を与え、よりよい生活を実現するため、疲労こんぱいし、苦しく辛くても、耐えて、頑張る生き方である。尼僧たちの指導と援助をジャンプ台として、喜びのすくない日常をとうして、学び、実践し、改良を重ねる努力の連続を、切れそうになるのをこらえながら、日々、黙々と保っていく母親たちの姿勢にこれまでとちがう刻苦のコロンビアを見る。

ここ数年、この種の「格闘」グループがいくつも生まれてきたと聞いた。この底辺からのボトムアップの動き、力は、コロンビアにとってその再生ではない、新生である。雇われて耐えた、「搾取」されて我慢した、というこれまでの受け身の頑張りではない。自立した共同事業をめざす底辺からの苦闘である。基礎教育と職業訓練を介し、技術と共労と経営を学び、下から、国力へとつながる、新しい民間の活動の胎動である。21世紀、コロンビアの発展はこのボトムアップの力をどこまで育てられるかにかかっている。

おわりに

19世紀のはじめに独立を達成しても、16世紀来旧宗主国スペインが擦り込んだ習俗は人々のメンタリティのうちに居座り残っている。為政者の多くは相変わらず国家、社会を私物化し、統治するエリートとしての自覚はきのうと変わらない、その一方で、統治されることに慣れてしまった民にとり、自立した市民、とは言葉でしかない。自分で考える習慣、必要性を与えられないできた人々は、考えろ、努力せよ、と言われてもとまどいが大きい。そこで、高教育を受けたエリートの白人が、政府の役人として、NGOの幹部として、また、カトリックの聖職者として、庶民に、自分で判断し行動する、とはなにかを指導する。が、指導される人々は、まちがった指導にも従う。

教育が普及した先進国の企業でも、従業員

による自主管理経営は容易なことではない。カトリックの尼僧団体「善導会」Buen Pastorは、社会の最底辺を生きてきた女性たちに自活の道を与えるべく、彼女たちによる縫製起業を目標として掲げた。カトリックの信仰をもってしても奇跡はむずかしい。

まさにボトムアップの具体化を狙うこの試みはまだ10年弱の歴史しかもっていない。この尼僧会が意図しているのはたんなる精神訓話、識字教育ではない。飢えた子をかかえ、疲労しきっている母たちに現金を稼がせよう、という、物への渇望である。この国の歴史始まって以来の壮挙が一気呵成にできるわけがない。試行錯誤のひとつのプロセスとなるのかもしれない。

貧者救済は宗教の重要課題であり続けてきた。当然、歴代政府のトップ責務でもあったはずだ。そして、教会と政治は、ここラテンアメリカにおいて、しばしば結託し、たがいの懐を肥やしてきた。今、注目に値するのは、底上げ作業が、スペイン、ヨーロッパの美辞麗句の亜流に堕したこの国のあでやかな文化と無縁のところで、質素、無学、極貧の人たちにより、苦渋のうちにスタートしたことだ。

参考文献

Eduardo Diaz Uribe [1986] El clientelismo en Colombia, Bogotá, El Ancora.

Jorge Enrique Robledo Castillo [2000] www.neoliberalismo.co.co、 Bogotá, El Ancora.

Plinio Apuleyo Mendoza, et al. [2000] Fabricantes de miseria, Barcelona, Plaza & Janés.

German Castro Caycedo [year?] Colombia amarga, Bogotá, Carlos Valencia.

Alvaro Tirado Mejía [1983] Introduccion a la historia economica de Colombia, Bogotá, El Ancora.

Carlos Rangel [1987] The Latin Americans, New Jersey, New Brunswick.

Lawrence E. Harrison [1985] Underdevelopment is a state of mind, Lanhan, Madison Books

Cesar Augusto Velasquez, et al. [1990] Educación de Adultos; educaión de segregados, Medellín, Universidad de Antioquia

Sergio Naranjo Pérez y Luis Pérez Gutiérrez [1996] Educación para una nueva sociedad, Medellín, Ediciones Edúcame.

Rodrigo Parra Sandoval [1986] Los Maestros colombianos, Bogotá, Plaza & Janes.

ibid, [1992] La calidad de la educación, Bogotá, Tercer Mundo.

Hernando Gomez Buendía (ed.) [1998] Educación la agenda del siglo XXI, Bogotá, Tercer Mundo.

Orlando Albornoz [1993] Education and society in Latin America, Pittsburgh, University of Pittsburgh.

Aline Helg [1984] Civiliser le peuple et former les élites, Paris, L' Harmattan.

コロンビアの日刊紙

El Tiempo

El Colombiano

La Patria

ホセーカルロス・マリアテギ[1988]　ペルーの現実解釈のための7試論（原田金一郎訳）柘植書房

大和総研[1995]　これからのラテンアメリカ経済、日本実業出版社

丸谷吉男[1999]　中南米の経済と新自由主義、TOKO出版社

細野昭雄・恒川恵一[1986]　ラテンアメリカ危機の構図、有非閣